

令和7年度学校評価中間報告書【中間報告提出締切】

学校名（四季が丘小学校）

評価計画					自己評価					学校運営協議会	改善方策
中期経営目標 (めざす児童生徒像)	短期経営目標 (めざす児童生徒像)	目標達成のための方策	評価項目・指標	目標値	中間 8月	最終 2月	達成	評価	結果と課題の分析	委員評価 コメント	
<確かな学力> ・「主体的対話的で深い学び」の実践 ・「学びに向かう姿勢」「自己有用感」の育成	・基礎・基本の徹底と学習意欲の向上	・基礎・基本の問題の繰り返し学習 ・めあて、まとめ、評価の一体化	・学力定着状況調査 全国平均以上	+2以上	—	—	—	—	全国学力状況調査では、国語科が72(+5.2)、算数科が57(−1.0)、理科が61(+3.9)であった。3教科とも基礎学力の定着を図ることが引き続きの課題である。 特に算数科では、昨年度に引き続き「図形」領域での課題が大きい。図形の意味や性質についての理解が不十分で、正答を導き出せていない。6年間を通しての系統的な指導が必要であると考えられる。	どの学年も落ち着いて集中して学習ができており、先生や子ども達の表情がよかった。基礎学力の定着にはつづきの分析を行い、系統性を考えながら反復学習を行ったり計算力の向上を図ったりする必要がある。	夏休みに職員で全国学力状況調査の結果分析を行い、学年ごとに2学期以降の取組を考え、見通しをもって指導を行うこととした。算数科では、児童のつまづきを想定し、ヒントカードを作ったり、操作的活动を取り入れたりしながら指導を行う。算数用語を用いて考え、説明させながら、図形の意味や内容について理解が深まるように各学年の発達段階に応じて取り組んでいく。
	◎学びに向かう姿勢の育成 ・特別教育の視点を効果的に活用した授業づくり	・「学びに向かう姿勢」を育む算数科の授業改善	・「算数科の学習をもっと続けてやってみたいと思う」児童の割合	85%	72%	—	84%	B	学びに向かう姿勢については、児童の意識調査より、課題があるのとらえている。全教科を通して問題を読むのが面倒くさいと思い、読まずに回答する児童や無回答の児童が一定数いる。また、算数科への苦手意識や答えが出て自信をもって伝えられないなど、本校の課題である自己肯定感の低さに関係していることも考えられる。既習事項が身に付いていない、次の学習に生かせていない、などの知識不足に関することや考えを順序立てて説明することに難しさを感じるなど、思考・表現の領域で困難さを感じている児童もいる。	教室に貼ってある既習事項をたよりに考えている児童の様子が見られた。今の児童は生活体験が乏しいため、作業的・体験的な活動や具体物の操作を行い、生活と結び付けた問題を作るなどの工夫を必要とする。算数の学習が好きな児童の割合を増やして欲しい。ICTの活用も更に進め、答えだけでなく、なぜその答えにたどり着いたか、解き方をしっかり説明させることを大切にしたい。	今年度、教職員は、児童が苦手意識をもたず、進んで学習に向かう姿勢を育むための授業づくりについて研究を行っている。教室に既習事項を掲示することで、既習事項を使いながら課題を解決し易くしたり、ワクワクするような単元設定を行い、学習意欲を高めたりするなど、全校でそろえて取り組んでいく。また、図形領域を中心に1年から6年までの系統的な指導を意識する。単元計画を掲示し、児童と共有することで、児童に見通しをもたせ、学び方や問題を自己選択・自己決定が出来る授業づくりを行うことで、算数科の学習をもっと続けてやってみたいと思う児童の割合を増やしていく。
		・主体的な学びを伸ばす個別最適な学びの場の工夫 ・授業研究の充実	・「課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組む」児童の割合【小中共通項目】 ・「算数科の指導で見通しをもたせて行うことができた」教師の割合	85%	88%	—	104%	A	今年度は特に、算数科を中心に単元計画を作成し児童に提示したり、既習事項を意識し、系統的な指導を行ったりして授業を行っている。	今年度は特に、算数科を中心に単元計画を作成し児童に提示したり、既習事項を意識し、系統的な指導を行ったりして授業を行っている。	今年度は特に、算数科を中心に単元計画を作成し児童に提示したり、既習事項を意識し、系統的な指導を行ったりして授業を行っている。
<豊かな心> ・自他のよさを認め合い、友達と協働しながら、共に高まり合う児童の育成 ・自己有用感の涵養	・規範、規律、礼儀の徹底	・四季小三大名人(挨拶、靴そろえ、右側歩行)の指導と評価の徹底 ・月に1度のあいさつ運動の実施	・「自分から進んであいさつができる」肯定的評価の児童の割合	90%	87%	—	97%	B	あいさつ名人の表彰は、児童にとって意欲付けにはなっており、進んであいさつをする児童が増えている。さらに良いあいさつが飛び交う風土にしていくことができれば、進んであいさつができる児童の割合が増えると考えられる。	児童はよく挨拶をしてくれている。挨拶をしてもらうととても嬉しい気持ちになる。挨拶やお礼が心から言える子どもに育って欲しいと願っている。また、教師だけでなく、友達同士で「～のおかげでありがとう。」と褒め合うと「人の役に立っている」という気持ちになり、自己肯定感の向上になると思うので継続して活動を行って欲しい。	運営委員会を中心とし、モデルを示したり、学年を巻き込んでのあいさつ運動を行ったりするなど、進んであいさつができる児童の輪を広げていく。あいさつ名人の表彰を引き続き行う。
	◎自他のよさを認め合う仲間づくり	・児童の自治的活動の充実 ・学級や縦割り班での良いところ見付けの実施	・「自分はクラスの人や友だちの役に立っている」肯定的評価の児童の割合【小中共通項目】	85%	78%	—	92%	B	自己有用感の肯定的評価の数値は、78%と目標値を下回っている。まずは、学級が安心して過ごせる場所になっているという大前提のもと、各学級や学校全体で自己有用感を高める取組を行っていく必要があると考える。安心して過ごせる場所となっていくために、今後も互いを認め合う活動に取り組んでいく必要があると考える。	2学期には、校内探検ツアーや掃除等、縦割り班での活動を予定していて、縦割り班の中で互いに認め合う活動を行っていく予定である。また、日々の学級でのよいところ見つけを一定期間行う等、学校全体でも取り組んでいくことで、自己有用感を高めていく。	

評価計画					自己評価					学校運営協議会	改善方策
中期経営目標 (めざす児童生徒像)	短期経営目標 (めざす児童生徒像)	目標達成のための方策	評価項目・指標	目標	中間 8月	最終 2月	達成 率	評価	結果と課題の分析	委員評価 コメント	
＜健やかな体＞ ・基礎体力の向上 と基本的な生活習慣の確立	◎基礎体力の向上	・体力テストの分析と体育科授業の質の向上	・春と秋の握力の比較、伸びた児童の割合 ・「運動をするのが楽しい」肯定的評価の児童の割合	80% 85%	69% 89%		86% 105%	B A	「運動をするのが楽しい」と感じている児童は多くいるが、体力面(握力)の向上にはつながっていない。握力については、生活習慣の変化により指先をしっかりと使う機会が減っていることや、1学期には表現運動や水泳の授業だったため、体育科の授業の中でもしっかりと握る機会を設けることができなかったことが原因だと考える。	運動が楽しいと感じるには、遊びを通して体力作りをするよい。握力については遊びながら鍛えられるグッズを置いたり、コーナーを作ったりするなどの対策をお願いしたい。	体育科の授業で、各単元に応じた誰もが参加できる運動を取り入れる。また、鉄棒や縄跳び、ボール運動など「握る・つかむ」動きを取り入れた授業を工夫するとともに、日常生活や家庭でも取り組める指先運動を紹介していく。
＜信頼される学校＞ ・働き方改革の推進	・業務改善を通じた学校組織の活性化の推進	・行事、活動の見直し、精選	・子供と向き合う時間が確保されていると感じる教師の割合	80%	87%		109%	A	連絡会の回数を減らしたり、クラスルームで情報の共有を行ったりして会議の精選を図っている。放課後学年で週案や児童の様子などを交流する時間が確保できるようにしているが、忙しい時期はなかなか時間が取りづらいこともある。	信頼される学校を図るためのアンケート項目は再考の必要がある。ICTの活用をさらに進め、引き続き子ども達と向き合う時間の確保に努めて欲しい。	子どもと向き合う時間が確保できるよう、校務DX化を進めていく。また、行事などの際は、出てきた反省を大切に、年度内に次年度の計画を修正できるようにしていく。
・コミュニティ・スクールの推進	・地域と共にある学校づくり	・地域学習の充実	・地域と連携したふるさと学習を全学年1回以上行った割合	100%	83%		83%	B	校区内の探検や地域を題材にした総合的な学習の時間の単元実施など、地域の方との連携を図りながら、ふるさと学習を行っている。84%の児童が「地域や社会をよくするために、何かをしたい」と肯定的な回答をしている。自分も地域の一員として、役に立ちたいという自覚が芽生え始めていると考える。	四季っ子応援団の応援のもと、地域と学校が協力して学習を行っている。今年度は、防災キャンプが中学校開催となり、小学生の参加者が少なかった。地域清掃や地域イベントなど、先生や児童に積極的に参加してもらいたい。	全学年、地域と連携したふるさと学習を行っている。四季っ子応援団や四季が丘市民センター等と連携を図りながら、児童が地域の一員として活躍できるような学習活動を更に展開していく。

- ※ 中間評価は、8～11月に実施することとする。
- ※ 中間報告は、本年度の重点目標についてのみの報告でもよいこととする。
- ※ 中間評価の実施月を記入し、この時点での実数値を記入する。
- ※ 「評価」の項目については、「達成度」は「報告期の数値／目標値」である。
「目標値」に対する「達成度」をA～Dで評価する。(A:100% B:80%以上 C:60%以上 D:60%未満)
- 「不登校児童生徒が〇人以内」等逆転項目の評価については、2～4段階で評価できるよう学校で定める。
- ※ 達成度の度合いから、評価項目・評価指標・目標値が適切であったかという視点でも見直し、目標値の修正や指標の変更・追加があってもよい。
- ※ 中間報告書の提出の際には、学校関係者評価の結果が反映されていなくてもよい。
- ※ 参考資料があれば添付すること。